

平成 22 年 6 月 1 日現在

研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19720039
 研究課題名（和文） 古代東南アジアにおける三尊像図像の研究
 －タイ・ミャンマーの図像を中心に－
 研究課題名（英文） Iconography of the Triad in Ancient Southeast Asia
 －Especially Research on the Iconography of Thai and Myanmar－
 研究代表者 原田あゆみ（HARADA AYUMI）
 独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館・学芸部文化財課資料登録室・研究員
 研究者番号：20416556

研究成果の概要：本研究は、古代東南アジアの三尊像図像の成立と展開を明らかにすることを目的に、その第一段階としてタイのドヴァーラヴァティ、ミャンマーのピュー、モンの彫刻を中心に調査、研究を進めた。2006年度以前に調査してきた資料と今回新たに得た資料を比較・検討することで、三尊像図像の展開についても、ベンガル湾地域－ミャンマー－タイ内陸部が有機的につながっていたことが確認されるなど、期待通りの成果があげられた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：タイ、ミャンマー、三尊像、古代東南アジア、図像、彫刻

1. 研究開始当初の背景

仏教における三尊像は、一般的に仏陀像を中心に左右に脇侍菩薩像を配する。これは大乘仏教美術の代表的な図像で、日本、中国では彫刻、絵画に多くあらわされた。もちろん三尊像の起源はインドにあり、5～6世紀頃からインド文化の影響を強く受け始めた古代東南アジアにも、その作例があることは従来知られている。しかし、特にタイのドヴァーラヴァティ、ミャンマーのピュー、モンの三尊像図像については、東南アジアにおける大乘仏教の広がりをも明らかにする上で重要な資料であるにも関わらず、これまで十分に正当な評価を受けてこなかった。

タイ、ミャンマーを中心とする上座部仏教

を受容した仏教王権下では、古来の民間信仰、ヒンドゥーの神々および大乘仏教や密教系のもろもろの信仰は、11～13世紀に広まったスリランカ系の上座部仏教という共通の価値意識にとりこまれ、本来の姿が見えにくい。上座部仏教下にあつて判然としなかった大乘仏教の図像を掘り起こすことは、上記の状況を乗り越えて、仏教美術に新たな地平を開く上で重要な課題である。

2. 研究の目的

古代東南アジアの三尊像図像の基礎データを集積・分析し、もって三尊像図像の成立と展開を解明するための端緒とすることである。

3. 研究の方法

- (1) 日本国内、東南アジア諸国、インドの博物館や寺院遺跡において彫刻作品を調査
- (2) 写真資料、文献資料の収集・整理
- (3) 現地研究者との意見交換

4. 研究成果

上座部仏教下にあつて判然としなかった大乘仏教の図像を掘り起こすことを主要な課題として、下記の成果を得た。

(1) 現地調査による成果

- ① ミャンマーを初年度の調査実施国とし、ピューおよびモン関係の図像について、エーヤーワディー河中流・下流域、およびタトン周辺の遺跡および博物館の資料を調査した。特に、これまで日本では知られることのなかった蒙の作例を実見することができ、タイ領土内のドヴァーラヴァティー文化圏の遺例と関連するものが看取された。



三尊像奉献板（モン州立モン文化博物館）

- ② ベトナムのチャム彫刻の調査を行い、東北タイのドヴァーラヴァティー美術の図像との比較を行った。三尊像に関しては継続的な調査が必要だが、雲気文においては東北タイのカーラシン以北の遺例と近似する表現がみられた。三十三天降下図における三尊像図像の展開などを見据えた上で、今後検討の余地がある。



建築部材レリーフ（ミーソン遺跡）

- ③ タイのドヴァーラヴァティー美術に関して調査を行った。継続的に2006年以前に調査してきた資料のうちバンコク国立博物館、ピマーイ国立博物館、セーマームアン遺跡保管分の一部を再調査し、東北タイにおけるモン、クメールの遺例について再認識した。



パナッサボディーに乗る三尊像
（ピマーイ国立博物館）

- ④ インドのコルカタ周辺とオリッサ州におけるパーラ時代の遺例を、博物館、遺跡において調査を行った。仏教の三尊像図像の起源はインドにあるが、特に仏教図像に大きな変化が起こる 8 世紀後半から 9 世紀、東南アジアの図像にもその変容が見られる。中でもバングラディッシュ国境ベンガル湾沿岸地域から出土した資料はピュー、ドヴァーラヴァティーに同系統の図像が多く、今後、ヒンドゥー・仏教の混淆、変容の過程を探り、比較研究する上で有益な資料を実見することができた。



ジャグジバンプール遺跡レリーフ
(西ベンガル州立考古博物館)



同上 (仏陀像)



同上 (シヴァ像)

(2) 資料の収集・整理から得た成果

上記の調査成果をもとに古代東南アジアの三尊像図像の基礎データを作成した。

また、現在知りうる限りの、日本国内に保管される古代東南アジアの三尊像図像について、その基礎的なデータを収集した。

2006 年度以前に調査してきた資料と今回新たに得た資料を比較・検討することで、三尊像図像の変容については、ベンガル湾地域－ミャンマー－タイ内陸部が有機的につながっていたことが確認されるなど、期待通りの成果があげられた。

(3) 現地研究者との意見交換から得た成果

本研究の協力者であるドヴァーラヴァティー美術の研究者と、今回の調査資料について意見交換を行った。具体的には、東北タイにおけるドヴァーラヴァティー時代のヒンドゥー、仏教の図像が地域的習俗の中で変容する様相に焦点をあて、関連する資料の検討を行い、基礎データの充実に向け協力を得た。

また、国内におけるドヴァーラヴァティー、ピューの三尊像図像を含む資料については研究者を招聘し、資料を共に実見し意見交換を行うことで、新しい知見を得ることができた。



2008 年 1 月 17 日

バンコク国立博物館保存修復部にて調査および意見交換



2009 年 4 月 15 日 (繰り越し申請による)
九州国立博物館にて調査および意見交換

上記の成果を踏まえ、今後は各地域の重層的な信仰の様相を鑑み、それぞれをつなぐ具体的な交易ルートを探っていくなど、美術史

学だけではない多分野の視点を意識した調査研究を続けていく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

原田あゆみ、「九州国立博物館所蔵 モン・クメールの青銅製仏像について」、九州国立博物館紀要『東風西声』、第3号、42-51頁、平成19年(2007)、査読無

原田あゆみ、「ドヴァーラヴァティ時代の法輪図像 —パナッサボーディーに乗る三尊像の成立と展開—」、『鹿島美術研究』、332-343頁、平成20年(2008)、査読無

[学会発表] (計1件)

原田あゆみ、「今夏のミャンマーのモンとピューの遺跡の調査報告」、東南アジア彫刻史研究会第27回例会、平成19年10月21日(2007)、大阪人間科学大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

原田あゆみ (HARADA AYUMI)

独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館・学芸部文化財課資料登録室・研究員

研究者番号：20416556

(2) 連携研究者

① 藤田 励夫 (FUJITA REIO)

独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館・学芸部博物館科学課保存修復室・室長
研究者番号：20416554

② ソムチャイ・ナ・ナコンパノム

(Somchai Na Nakhonphanom)

タイ王国芸術局

③ サクチャイ・サーイシン

(Sakchai Saisingha)

タイ王国シラパコーン大学教授

④ ルンロート・タムルンルアン

(Rungroot Thamrungruan)

タイ王国シラパコーン大学講師

⑤ チラポーン・アランヤナーク

(Chiraporn Aranyanark)

タイ王国芸術局保存修復部長

⑥ サネー・マハーポン

(Saneh Mahapol)

タイ王国芸術局保存修復部職員